アニメ部

Contents

テーマ→「魔」

- 3… 尾藏
- 5… 朝羅
- 9… 智川巳
- 12… モモ
- 13… こばた

⚠ 当本内の物語はフィクションです。
実在の人物、団体、出来事とは一切関係ありません。
また、版権を扱った作品に関して、
作者様方とは一切関係ありません。

2010/03/01　アニメ部

じた
じた
Curse
Dum!
ほぁた
Britain
Magic

あとがき

改めまして今日和日
今回も遊んでしまった尾藤です。

部誌のテーマが「魔」という事で
魔法とか魔術とかしか
思い浮かばなかったので…←
英国を描きました。

眉毛は髪の毛が難しいですね
某2424動画で眉毛フィーバーが
巻きおこっていたので(笑)
英を描いた大半の理由がそれです←

3年生の先輩はもう卒業ですね(^^)
最後の部誌こんなのごめんなさいorz
優しい先輩に囲まれて、この1年
本当に楽しかったです(^^)

アニメ部は不滅ですーー(^^)

今まで本当に
ありがとうございました!!!

2010.03.01

「ルミナリエ」

ここはアズマール王国の首都ウェリテから少しはなれたところにある村、リャントル。
以前は、冒険者が集まりにぎわっていた村だったが、あるときを境に寂れていった。
その村の中心にあるボロボロの家の前に、１人の女の子が立っていた。
彼女の名前は、アルテミーナ・ウェンゲル、魔法使いだ。
この世界の魔法使いは私たちが想像するように魔法を使ったりはしない。
誰でも魔法は使える。その中でも主に冒険者達が使っている。
彼らは小さな玉に籠められた魔法を念じて呼び出し使う。
その小さな玉に魔法を籠められることができる者たちを魔法使いと呼ぶ。

「この家、こんなにボロボロになっちゃったんだ。まず、掃除しなくちゃ。」
数年前までは、この家にも人が住んでいた。
アルテミーナと彼女の祖父で魔法使いだったエンゲルの２人。
エンゲルはこの場所で『ルミナリエ』という魔法を売るお店を開いていた。
孫のアルテミーナに魔法使いの素質を見出し引き取ってからは２人でお店を続けていた。
エンゲルのつくる魔法はとても有名で、冒険者が集まってきていた。
しかし、エンゲルは５年前に流行り病で亡くなってしまった。
アルテミーナは親のもとで暮らすことになりルミナリエは閉じることになった。
「もう、そんなにたったんだね。」
この国の成人は１５歳から。
先日、１５歳になったアルテミーナはルミナリエを再開させるため、この村に戻ってきた。

それから数日、アルテミーナはやっと家の掃除を終えた。
その間、村であったのは老人ばかりだった。
若い人達は皆、首都や親戚のところへ移り住んでいた。
「全然、違うなぁ。」
彼女は今、首都ウェリテを訪れていた。
村の中では必要なものが買えないからである。
生活必需品や、今日は魔法をつくるための材料も買った。
「竜の珠は買えないか。仕方ない、取ってくるしかないね。」
竜の珠とは魔法をつくるのに１番大事な材料だ。
魔法を籠める小さな玉が竜の珠なのだ。
上手い人はこれさえあれば魔法をつくれる。
他の材料は失敗を減らすためにいれるのだ。

ただ竜の珠は取るのに苦労する。
高い山の頂上付近にしかない木になる木の実なのだ。
ウェリテの周辺にも山はたくさんあるが、竜の珠が取れるのはこのあたりで１番高い山、ダリだけである。
「１人じゃ無理だね。冒険者を雇うか。」

世界隔離の重要な都市にはギルドが存在していた。
冒険者達はそこに集まり、仕事を探したりするのだ。
それは、商人が都市を移動するときの護衛だったり、危険な場所への同行だったりする。
「おじさん、久しぶりだね。ダリの頂上まで行きたいの。１番安い冒険者は？」
ギルドの中は大体どこも同じだ。
バーのようなカウンター、横には掲示板がある。
「失礼だが、君は？」
「アルテミーナだよ。５年たつ間に忘れちゃった？」
それを聞くとカウンターの中にいた男の表情が変わった。
不信気な表情だったが、朗らかな笑顔になった。
「アルかい？久しぶりだな。随分と変わっていてわからなかったよ。どうしてここにいるんだ？」
「私、成人したの。だからルミナリエを再開しようと思って。竜の珠を取りにいきたいんだけど、誰かいる？」
「ルミナリエを再開させるのかい？喜ぶやつも多いよ。戻ってくるかもしれないと待ってたやつもいるんだ。」
男は店内をぐるりと見渡すと、ため息をついた。
「顔馴染みのやつは皆でているみたいだな。あいつらなら報酬を取らないでやってくれると思うんだが。」
そこまで言うと男は、手元を見た。
「ダイクが今晩戻ってくる予定だな。明日また来ないか？」
「報酬くらい用意してるよ。ダイクかぁ。久々に会いたいな。うん、明日また来るよ。」
アルテミーナが帰ろうとしたとき、「マスター！」と言った大声が響いた。
「俺がいるんだ。どうしてやらせてくれない？ダリくらいいけるよ!!」
カウンターの中にいた男、マスターはあきれたように首を振った。
「そういうことじゃない。ダリまでの同行となると高いだろ。ダイクならアルと聞けば無報酬でもやる。それだけだ。」
「その子、何者なんだ。あのダイクさんが無報酬でもうけるなんて。」
「ただの顔馴染みだよ。おじさん、また明日来るね。」

アルテミーナはそういってギルドを出た。
「きっと、大袈裟に話すんだろうな。」

「彼女の名前はアルテミーナ、皆アルって読んでいた。ルミナリエを知っていたか？」
「聞いたことならある。すっごく腕のいい魔法使いだったんだろ？」
「彼女はその孫だ。後継者でもある。ここにも竜の珠を取りにいく同行者を探しにきていた。皆ルミナリエにはお世話になっていたからな。喜んでついていったよ。」
「そうだったのか、ダリまで行くならまだ間に合うな。行ってくる。」
彼はそういうと、飛び出していった。

「アルテミーナだよね、さっきまでギルドにいた。」
突然声をかけられたアルテミーナは驚いて目を丸くした。
「あなたは…、確かギルドにいた。」
「そう、俺はマルス。ダリに行く用事ができたんだ。行きたいって言ってたよね？一緒に行こう。」
それだけ言うとマルスはアルテミーナの手を引いて歩き出す。
「ありがとう。私のことはアルって呼んで。じゃあ、行こう。」
マルスが歩き出したほうとは逆に、アルテミーナは歩き出した。
「道、そっちじゃないよ。」
「あはは、悪い。」

「マルスは何で冒険者になったの？」
アルテミーナとマルスは今、ダリの中腹を歩いていた。
ここまではこれといったモンスターに出会うこともなく、順調に進んでいた。
「１番簡単に稼げるからだな。早くお袋を楽にしてやりたくてさ。」
「へぇー、お母さん思いなんだね。」
「まぁな。女手一つで俺を育ててくれたんだ。」
アルテミーナはどうすればいいのかわからなくなって、黙ってしまった。
「暗くなるなよ。悲しいなんて思っちゃいない。」
落ち込んだアルテミーナを励ますようにマルスは言った。
「おい、あれは竜の珠だよな。見えたぞ、もうすぐだ。」
途端に、マルスの目つきが変わった。
「動くな。何かいる。」
マルスはそっと歩いていった。
木の陰から、大きなモンスターが飛び出してきた。

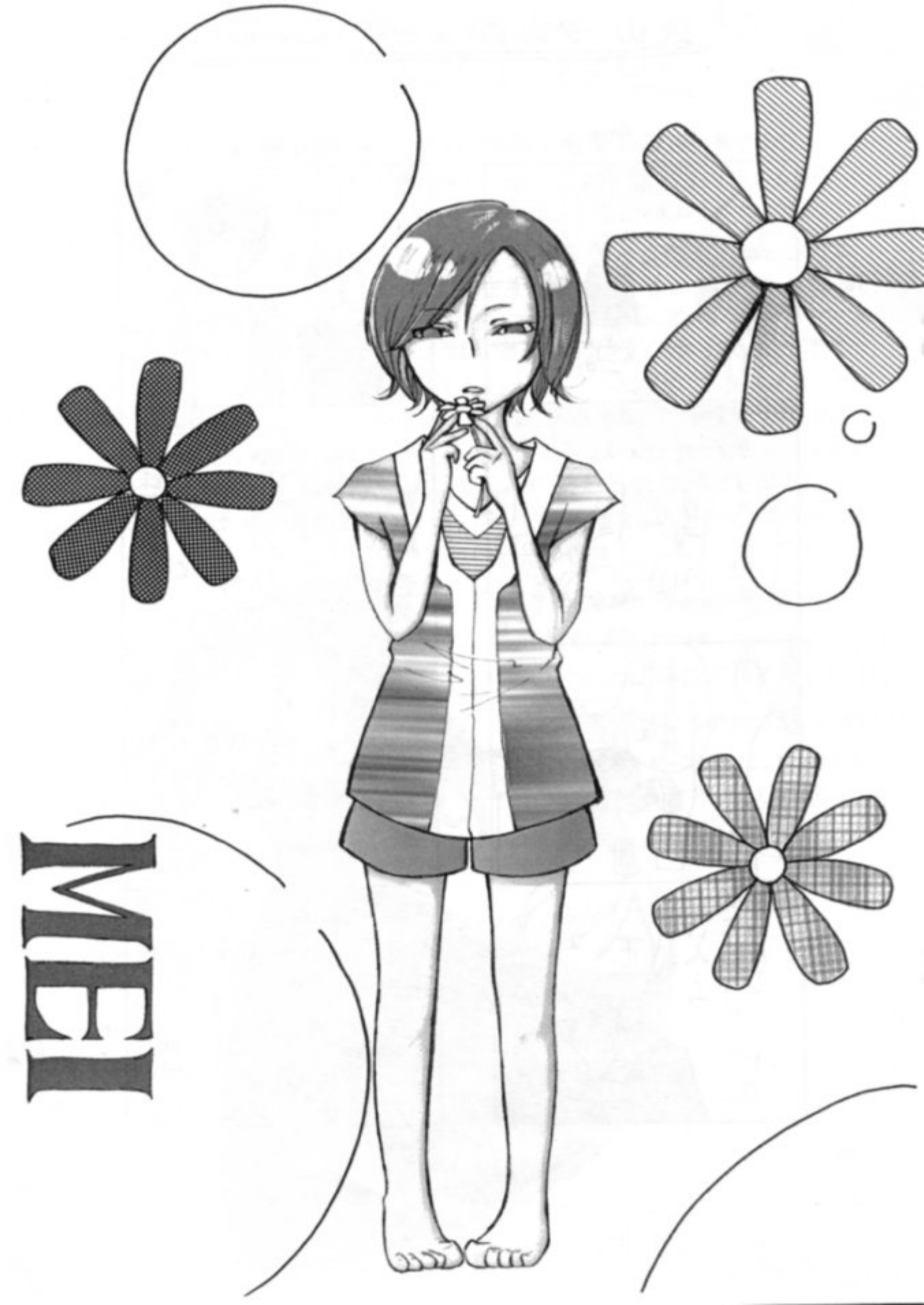
今まで見たこともないほど大きなモンスターにマルスは苦戦していた。
「確か、炎はあったはず。いけーっ！」
突然、モンスターが燃えた。
もだえ苦しむモンスターにマルスが止めを刺すと、塵となって消えていった。
「ありがとう、助かった。」
「ついてきてもらってるのは私だもん。」
それだけ言うと、アルテミーナはマルスの全身を眺めるように見た。
「魔法、持ってないの？」
「高くて買えないんだ。今までは他の冒険者と一緒だったしな。無理する必要はなかった。」
アルテミーナはため息をつくと、竜の球をとってきて何かを始めた。
竜の珠から光が溢れ、どんどん大きくなっていって、真っ赤になった。
「これあげるよ。あったほうがいいでしょ？」
マルスに手渡したのは魔法玉だった。
「ありがとう。」
「明日、リャントルまで来てくれたらもう少し渡すよ。今日のお礼。」
「ありがとう。」

次の日、マルスはリャントルを訪れていた。
「すみません、アルに会いにきたんですけど家はどこですか？」
「アルちゃんに？あの家だよ。」
「ありがとうございます。」
指差された家の前まで来ると、アルが出てきた。
「来てくれたんだね。はい、これ。また今度、同行をお願いしてもいい？報酬は魔法玉で。」

２人の物語はここから始まった。

ｆｉｎ

朔羅


MEI

沢山 子太郎の日常（4コマver）

◦買い物◦

◦僕の弟◦

あとがきらしきもの。

こんにちは。3年川分です。念願の今年3回目の部誌ですね。テーマをしっかり無視してしまい申し訳ないです。(自由に描きたかったんです!!)とりあえず下のイラストは小悪魔で。

さて…もう卒業ですか。私はこうして最後まで部誌に参加させていただけて本当に嬉しいです。まるで寄生してるようです。3年間6つの部誌を出すことができましたが、これでも成長した方なんですよ…。とても未熟な私ですが、アニメ部の歴史に何かしら残すことができていればいいなと。思っております。

後輩のみんなへ。今まで(1年間や2年間)、みんなと活動できて良かったです。教わったこともたくさんあり、教えたことも…あるかな?みんなとても良い個性を持っていると思うので、それを大切にしてどんどんLEVEL UP↑していってくださいね。アニメ部の活動がさらに活発になるといいと思います!

アニメ甲子園への参加や学祭の展示など続けてほしいです。新しいことにもチャレンジしてみて下さい。

(木幡さん、シナリオ入選おめでとう!)

もうスペースなくなってきました。長文失礼しました。では。

アニメ部は不滅だー!!(おー)

智川 巴。

アニメ部 ありがとう!

モモ

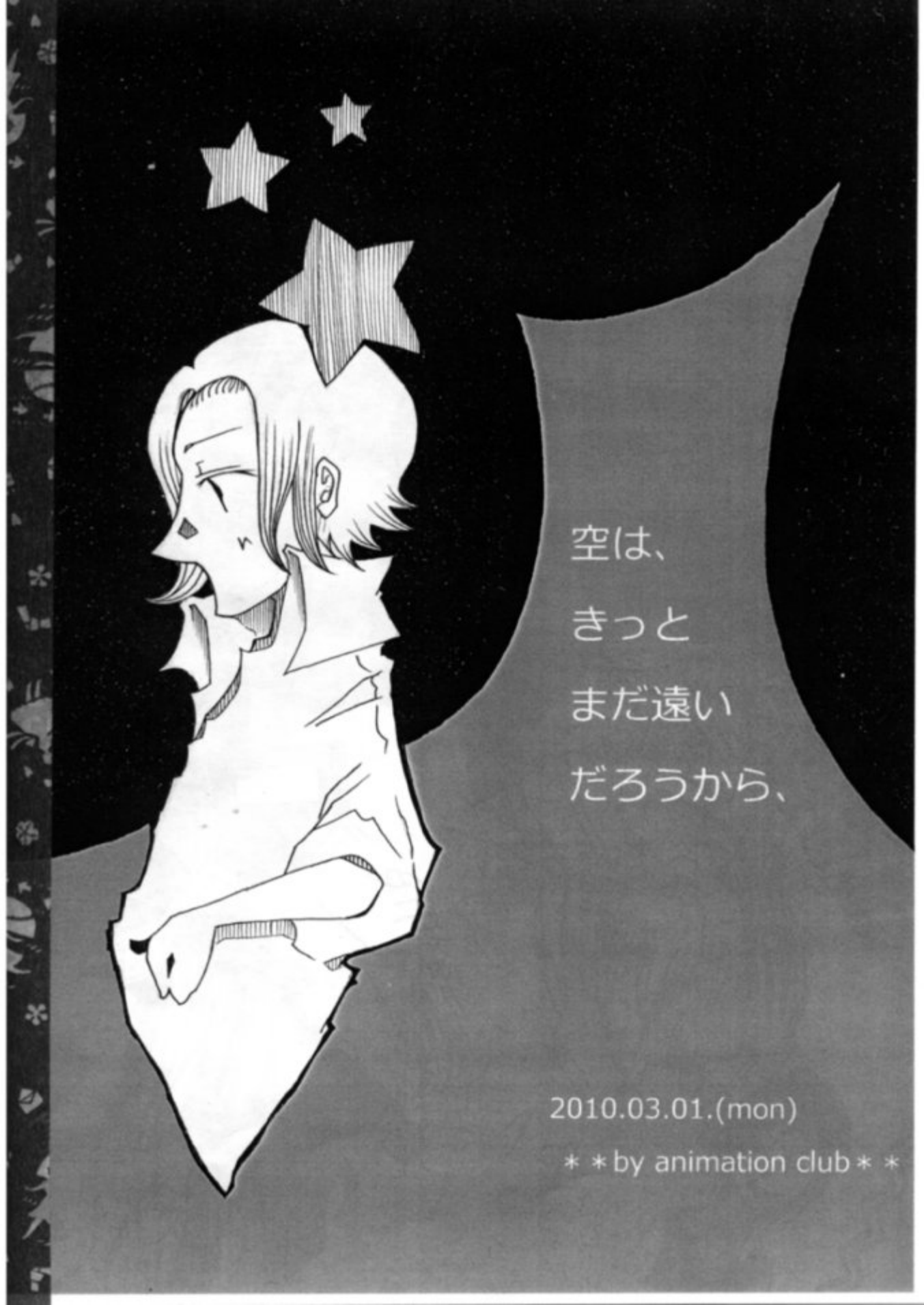
＊あとがき＊

こんにちは！　今回「魔」というちょっとアバウトな(笑)テーマだったのでどうしようか迷ったんですが、小さな脳みそで考えた結果「『魔』って何だ？羽か、羽だな！！」というたいへんシンプルな答えに辿りついてしまいました(゛・ω・゛)ﾊﾞｶﾛｰ　キャラは全部共通のわたしがめったに描かない髪形の男の子です。うん、ショタならまだいけんだよ、もう少し成長すると描くのが楽しくなくなるんだよ←　男って描く意欲湧かないですよね、わたしだけですか？　そんなことはないはずだ。「羽だー！！」と叫んでおりますが、実際はオブジェや背景で羽っぽく見せてるだけ、なんです、けど……気づいてもらえただろうか、もらえた、よね？　……うん。←　特に名前は決めていないのですが（とりあえず仮にウーミンくんとでも）今後も何かの機会に愛でていけたらいいな～と思います(＊゛∀゛＊)

さて、お世話になった先輩がたと部誌作成が出来るのも今回が最後です部長のくせに原稿提出遅れたり編集に立ち会えなかったり色々ご迷惑をかけたと思います……でも！　そんなわたしも恩義は忘れない女です！先輩がた、今までたいへんお世話になりました。そして卒業おめでとうございます。卒業しても皆さんが素敵な毎日を送れますように！！

こばた

ウーミン＝名無し(無名)


空は、
きっと
まだ遠い
だろうから、
2010.03.01.(mon)
＊＊by animation club＊＊